









40-9031

新法詩評一

國民の友 世九号

池袋 清風



詩歌、譯も亦然り改米名詩中唯意義、骨ヲ指テ得リ  
當テ我國語感情ノ皮肉ヲ加ハサルハ何ノ益アリヤ  
古來我國ニ長歌アリ然レニ今新作ト云フハ漢語翻俗語ヲ  
以テ成リタルニ由ルカ  
我國ノ普通人民ヲミテ貴リ解ミ且感セシメシハ我國語ヲ  
ミテ用ヒサルハナラン  
國語ニミテ如何様ニ言ハルハ外國語トミテ用ハルハ何リヤ  
我國ノ歌ニハ辭々同シク四季ノ感情ヲモ分クハ自然ノ理則  
アリ例ハハ霞ハ春ニ咲キ梅ハ秋ニ咲キ我輩ノ所用ナレカ如シ



詩文の感應

五十五号

下知養主人

粗幅の精巧美彩のもの、紋様は一つは神韻其中、  
なまなめなり

去れと斯く神韻の凡庸人は望むらう、強ておめんと  
れ、一抹の淡墨、唯紙絹と云ふもの、夏よりして刺繍は  
縦今其精と程めき、色彩の美は多少人目も毒は、  
こに似たり、爰に於て、知く詩文の感應は唯辭達調に  
ありて、  
著撰者の説

感御は文章の鮮情の哀怨なり、  
も思ひ、  
豈書の十束なり

人の心、感動くまどきと、浅業が痛は、  
つよそに思ひやり、  
も書丹の何の用、  
に誤いあり

詩文の佳なるもの二あり、  
爪姿を以て、  
むらつみ、  
退きの筆十二節文

爪情、  
感動せしあり、  
無味乾燥に候き、  
猶真なき

和文及和歌が雄大莊重、  
せしといて



都とばなすむと共に一かゝあきかせむ白の関 能因

(右爪續)

新にはまだ書葉にて見ゆがむ紅葉ありて鳥の関 頼政

(右爪終)

日本の詩に就て 今 五十五号

森 三溪

我、日本語の歌に於て、韻を押すを得(きかひ)、其の  
勢は孰とも可なり(平仄は設けずとも音数を定めて  
口調を整ふれば即ち平仄を定むるに同)今之を述  
ん、文代の頃漢詩の盛なりし時より以前、文字の發達に

伴ひ、俳人社会亦脩辭の用日月ありにより、已に和文  
の韻を押せるを企てたり、凡俗之選に載する所の韻の  
賦に俳人去來の作なり、其の中を左に採擇す

粟と盡し番を數ふは、 秋更にいほじ、(じ)

大妻と或も手に觸るれば、 病を生ず (づ)

愧かき文を散らして、 男中の心もぬげ、(げ)

怪しき算を作りて、 源平の心も問く、(う)

などや行か行めなして韻をすゝと云ひ、然れども、韻は  
横通の音を用ふべき者にして、縦行の音を用ふべき者にあらず  
右の押韻の者に口調も滑かざる功も見えぬ、心算何の  
役にも立たざるなり



又、本年四月十日、報知新聞、柳屋直孝先生の授書に、  
和語と名くる書、五言七言数字で載り

西行賛 (五言絶句横行の韻) 支考

けても秋の夕ぐれに、 空も其處に待て、置け、

ひとり鳴る者経は、 心なき此の法師、

哉 嘆 (七言絶句横行) 支考

人ふ心は闇にあらねど、 身ふみには踏み居ふとよ、

假寝の夢を覺て思へば、 いろねるに言は来ぬとよ、

之を教ふに、和語と漢語とに違ふ、共に五言七言とありに、

まゐと、和語の音数に依るとあり、口誦を然として詩と

称すこと偏あり、まゐと其の韻の横行ふことも如何にせむ、

氣の付かぬ文章に韻を揃ひて音あてまゐ、

是非齋銘 (陽韻) 許六

是と是とすゝは、 論(い)にけり。

非と非とすゝは、 誇(い)にけり。

座右銘 (上五) 芭蕉

人々短を、 言ふ事なれ。

己が長を、 言ふ事なれ。

俗語の中に知らずく、韻を揃へたる者ありて

伊勢音頭 (毎句同韻)

伊勢の連で持つ。 津は伊勢で持つ。

尾張名産は、 城で持つ。



狸謡

(天津繪の内座頭といふ請之の曲中、夏)

男よめ振る、

嫁下女をふる。

下心は釣瓶の、

縄を振ふ。

今

(昭和四年書より見たれば、秋古き流行歌なり)

お前百まで、

わーや九十九まで。

共に白髪め、

生くるまで。

横濱子守の謡

(傳韻)

ねこね寐る子にや、

吉箱七つ。

起きて啼く子にや、

石七つ。

併し、斯の如き韻に用ひる語、皆皆「き」「た」「め」「持」「ん」等、同語なれども、いふと書くとは言ひ違ふ。

左に挙ぐる者の如きは韻字の語、各別なふり以下、大に異達し  
る者も多し。

追分節

(毎句同韻)

坂は照る照る、

鈴佩は響る。

あひの土山、

雨が降る。

今

(傳句同韻)

来いとよふとて、

行かぬかたは渡る。

佐渡は四十九里、

浪のうづ。

鄙謡

(毎句同韻)

雨は降つて来る。

干し物はぬれる。

背なぐや兒が泣く、

飯や焦げる。



假令偶然にもせよ、其の韻脚を整へてゐるや、一層唱ひ  
よす所を見れば、国歌を以て韻を押すことは、大に音調  
を整ふるの利あると明けし。

左の前者より更に発達しし者なり

### 春

(毎對同韻)

矢田部良吉先生

春は物事よろこばし。

吹く風とてもあつてか。

庭の櫻や桃の花。

世に美しと見ゆる哉。

野々の雲雀は最高く。

雲井邊かに舞ひて鳴く。

### 生命

(毎句同韻)

坪井正五郎先生

息の出入とがらぬ血。

然るみならに好むは世。

清き速これ年。

時計の回り早く立ち。

遠くまで射した置。

或はまゐるも業とけち。

なきは則ち無能無智。

多くあつゝ氣とほち。

善き働きをなこ後。

そゝといはく此の年。

長篇にて、同韻を用ひ續けんとすには、「生命」の例の如く  
無智、低ち、右、などかぎ異類の詞一名詞、動詞、副  
詞等一を用ふるを巧みとせらる。







